

臨床検査技師 2,657 名誕生！

国家試験合格率 71.8%・・・

平成 21 年 2 月 25 日に実施された、第 55 回臨床検査技師国家試験により新たに 2,657 名の検査技師が誕生した。

出願者 3,968 名のうち、受験者 3,701 名、合格者 2,657 名で合格率は 71.8%の結果であった。合格は〈総得点 120 点以上/199 点〉の基準を満たした者とされた。今回の試験では、採点除外等の取り扱い問題は 4 題であった。

以下に、その他の職種の国家試験結果を示す。

- ◆ 医師
合格者数 <7,668 名/8,428 名>
合格率 91.0%
- ◆ 歯科医師
合格者数 <2,383 名/3,531 名>
合格率 67.5%
- ◆ 保健師
合格者数 <11,182 名/11,357 名>
合格率 98.5%
- ◆ 助産師
合格者数 <1,708 名/1,709 名>
合格率 99.9%
- ◆ 看護師
合格者数 <43,508 名/46,101 名>
合格率 94.4%
- ◆ 薬剤師
合格者数 <11,300 名/15,189 名>
合格率 74.4%
- ◆ 診療放射線技師
合格者数 <1,896 名/2,547 名>
合格率 74.4%
- ◆ 理学療法士
合格者数 <8,291 名/9,119 名>
合格率 90.9%
- ◆ 作業療法士
合格者数 <5,405 名/6,675 名>
合格率 81.0%
- ◆ 視能訓練士
合格者数 <624 名/675 名>
合格率 92.4%
- ◆ 救急救命士
合格者数 <2,071 名/2,578 名>
合格率 80.3%
- ◆ 言語聴覚士
合格者数 <1,344 名/2,347 名>
合格率 57.3%

＝厚生労働省発表＝

◆ 中日新聞 <けんさの話>

3 月 6 日掲載

第 17 回 <肝臓 上>

年一回のチェック不可欠

肝臓は「沈黙の臓器」といわれます。疲れやすさを感じたり、黄疸などが出現したときには、かなり病状が進行してい

ることがあるからです。このため、1 年に 1 回程度は健康診断を受けることが必要です。臓の病気の約 70% は、検診で見つけられています。血液検査の項目でよく見かける GOT (AST) や GPT (ALT) などは、肝細胞の中にある酵素です。肝細胞が壊れると血液中に漏れ出てくるため、そろって値が高くなります。胆管が詰まったときは GTP や γ -GTP、ビリルビンなどが高くなりますし、飲酒による脂肪肝では γ -GTP が大きく異常値を示します。肝臓は役割はとて多岐にわたり、「化学工場」にもたとえられます。たとえば「代謝」。糖質は小腸で吸収されて肝臓に運ばれ、グリコーゲンとして肝臓に、余った糖分は脂肪としておなかに蓄えられます。空腹になると、グリコーゲンを分解してエネルギーにして、それでも足りない時には、おなかの脂肪を動員して中性脂肪や糖に変えます。アルコールなどの解毒、不要物の排せつ、血液循環量の調節などをつかさどるのも肝臓です。命を守る化学工場の安全性のチェックを心掛けてください。

3 月 13 日掲載

第 18 回 <肝臓 下>

数値見て飲酒習慣改善を

お酒の強い人、弱い人がいます。これは、肝臓内のアセトアルデヒド脱水素酵素 (ALDH) の働きの差によるものです。体内に入ったアルコールは、代謝により毒性のあるアセトアルデヒドになり、顔が赤くなったり、頭痛や吐き気が起きたりします。これを無害な酢酸に変えるのが ALDH ですが、働きが弱かったり、まったく機能しないタイプが日本人を含むモンゴロイドでは、約半数に及ぶといわれています。このため、お酒が飲めない人は、いくら頑張っても飲めるようにはなりません。「酒は百薬の長」とも言われますが、これは 1 日にビール 1 本以内、日本酒なら 1 合以内の場合です。毎日のように、大量の飲酒を続けたら、肝臓は疲れてしまい、脂肪の代謝がスムーズに進まなくなってしまいます。この結果、肝臓の細胞に脂肪が貯まってフォアグラのような脂肪肝になってしまいます。細胞が膨らみ、肝臓の中の血管を圧迫、血流が悪くなり、肝臓の働きが低下してきますし、肝硬変になってしまう場合もあります。血液検査でおなじみの γ -GTP は、タンパク分解酵素で、アルコール摂取により肝臓に異常が出た場合に、著しく上昇します。数値を軽視せず、生活習慣の改善に努めてください。

3 月 20 日掲載

第 19 回 <糖尿病>

数値見て飲酒習慣改善を

厚生労働省の国民健康・栄養調査 (2006

年度) によれば「糖尿病が強く疑われる人は 820 万人、可能性が否定できない人は 1,050 万人。人口の 15% にあたる 1,870 万人が糖尿病またはその手前の状態」で、「国民病」というべき事態になっています。糖尿病とは、血液中の血糖値が通常より高い状態を指します。肥満などで内臓脂肪が増えると、血糖値を調節するインスリンの濃度が高くなり、その濃度を下げるために血液の量が増え、血圧が上がるという悪循環を起こし、さまざまな合併症につながります。病状が進行しなければ自覚症状が出にくく、患者本人が軽く考えやすいことが問題で、早期発見・治療のために臨床検査が重要になります。

よく使われるのは血糖値と「HbA1c」の検査です。血糖値は採血時の糖分の状態を表します。HbA1c とは、赤血球のタンパクであるヘモグロビン (Hb) にブドウ糖が結合したものの一部で、過去 1-2 カ月の血糖の総合的な高さを反映するといわれます。

糖尿病の予備軍は、四十代以降急激に増加します。この年代以上の人は、健康診断などを毎年必ず受け、糖尿病の疑いがあれば早めに対処することが大切です。

3 月 27 日掲載

第 20 回 <自己免疫疾患>

抗体を測定し病気を診断

人間の体には、ウイルスなどの異物を排除する機能があります。これが「免疫」と呼ばれるものですが、免疫機能が自分自身の正常な細胞、組織を「異物」と誤解して攻撃を始めると大変です。これによって起こる病気を「自己免疫疾患」と呼びます。関節リウマチ、全身性エリテマトーデスなど全身の組織に対し反応する型と、バセドウ病、自己免疫性肝炎のように特定の臓器、組織に対して反応する型の二種類があり、どちらも「抗体」と呼ばれるタンパク質で構成された成分が体内で作られて、自己組織や細胞などを攻撃します。臨床検査で、それぞれの疾患ごとに抗体を測定することが可能になり、病気の診断に貢献しています。たとえば、慢性関節リウマチではリウマチ因子という自己抗体が高率に検出され、全身性エリテマトーデスでは二本鎖 DNA に対する抗体が検出され、診断の強い根拠になります。

しかし、自己抗体が 100% の確率で血液中に存在するとは限りませんし、その症状や病期によっても検出頻度が違います。また陽性になったからその疾患であることが確定するわけではありません。専門医の臨床所見、症状など総合的な判断を仰ぐ事が大切です。